普通國文

上

ホ 2
225
1

本書はもと普通文の摸範となるべきものを集めたれば其の意味の解し難きふしなどは素よりなかるべしされど故事語釋等に至りては或は參考書を要せん事もあらんもし讀者にしてさやうの場合もあらば編者その質問に應せん

但返信用郵劵を添ふべし

明治廿三年二月　　編者識

ホ2
225
1-2

東京專門學校圖書
門 號 225 卷 1
明治廿三年九月廿日吉川半七氏寄贈

言文一致國文の序

言文の二途にわかれしより世の學者たち[illegible]大概中古以上の文体によりて清少納言などいふ手弱女の物せし草紙やうの書どもをのみ只做ひてこれをまねて耳遠き古言まじりはなはだ見なれぬ句調もてつゞりたてれば正しき文にはあれど甚しく惑へるものも多く解しかねざるのみならず其文の作用いかでのまゝに思想を述べまほしく言語我寫さんがためあるなる物事さへ今の世に

生れながら愚にて古人を気どり至て古文に擬
せんとするゆゑ動もすれば詞の不足に困じ
思想の半だに得いはずいかで履を削りて
足にあはせんの誚を免るべき況て丈夫が
筆とりてめゝしき業など学ばんとする義
ふくちをしきことならずやこゝに吾が畏友
なる佐年如し畠山如し相謀りて今の世
に適したる可き文の模範ともして此の書を
ぞ纂められしまことその事は誤れるなく
我さくかくして初学の徒に教へ諭さるゝその

功ゆゝしと謂つべし我れ嬉しさのあまり
大喜して疾く呼ばゝりつゝ此の書を世に
洪益あるを我証し且読者に告げてい
まことに古人はおのづから古文をなせりき人
は須らく古文をなすべし又曰く男は
男らしき文を作れ女は女らしき文をつくれ
時は明治庚寅の歳三月
元田直しるす

普通國文上の巻

例言

學藝の盛なることいまだ今日の如くなるハあらず又文章の亂れたるもいまだ今日の如くなるハあらざるべし抑言語文章ハ其の國の獨立を表はすものなれバ一定の姿あるべきハ更に論なし然るに今日世に用ひらるゝ文體を見るに古文にもあらず今文にもあらずして漢文をさながらに書き下したるやうなるあり歐文の口譯を其のまゝに寫したるが如くなるありて

動もすれバ其の意義の解しやすからぬさへをありこれ吾が國從來學問といへばたゞ漢洋の書を讀み習ふ事とのミ思ひてこの國の語格文法などハ度外に置きて顧ミざりし結果なり然れども是が日本帝國の文章豈今日のありさまにてやみぬべきなれバにや近來國文の讀本ものあまたこれ世に出でたれども多くハ擬古の文にして達意を旨とせる普通文を教へん料にハ不適當なるが如しすべて古文ハ今人の耳に遠く今文ハ古文にくらぶれバ鄙俚に流れやすし

故に今その中間に就きて漢語俗言をも雜へながらも簡潔平易にして通じ易くしかも國文の脉を失はずして其の模範となるべき者を集め子弟教育の料とせんとハ志たりしきこの書を普通國文と題せし所以なり

本書別に記序論説などの名目をたてず又抑揚頓挫照應伏線などのふしをも示さずこれ序といひ論といへども名詞動詞等の配置にかゝはるにもあらねバ又抑揚頓挫などいふ者もたゞ書く人の心々に定むるものにて固より法則とし

て教ふべきにもあらねバ今ハすべて省きて唯標記する所ハ左の三例に止めり

「」

人の言辭または他書に出でたる文辭等を引用せる處にハこの標を附せり

『』

右の言辭等の二重になれる處にはこの標を附せり

｜

今日普通には用ひなれたれど言語の用方穩ならぬ所まゝ甚しき鄙語または普通用ひざる古語などの所にハこの標を附して其の由を鼇頭に註せり

本書に載せたる文章の順序ハあながち作者の時代に拘らず平易なるを始として漸々高尚なるものに及ぼせり又引用書ハ毎篇文後に細書して其の出處を示せり

文字またハ言辭の足らざる處には□補を志るし贅字と覺ゆる處には□を志るし自他及時の違へる又ハ係結の違へるハ原字を圍みて□何々を志るし且鼇頭に註せり但その活用の違へる假字

の違へるどもハ印を附せずして直に正しつ覧者その本書と異なるを怪しむなかれ

本書ハ和漢學者よりはじめて稗史雜家に至るまでの隨筆紀行等の文章を採れり其の文ハ固より子弟の文範たらしめんが爲に書きたるものならねバ彼の文章軌範などの如くにはあらざるべけれど數百巻の書を閲してやゝ文範とするに足るべきものを集めたるなり但其の文ハ板本と寫本とを論せず廣く異本に校正し又諸書に引載せるものに參考して字句に異同あるものハ今人の校讐と雖も純正にして摸範とするに足るべきものに從ひ旨趣言辭等の解しがたからんとおもはるゝ處ハ鼇頭に略解せり」

本書に採録せしものゝ外普通文章の摸範となるべきものもとより尠からざれば他日また後篇を繼輯すべし

明治廿三年三月

編者識

普通國文上の巻 前篇

標目

四のたのしみ　貝原　益軒
老成の言ハ侮るべからず　荒井　尭民
學問　富士谷御杖
父兄訓自序　林　子平
知をひらくハ學問の効　貝原　益軒
幼兒の養育　雨森　芳洲
人ハ名よりも行にあり　柳澤　淇園
下部を使ふにも仁愛の心あるべし

中村　惕齋
牛馬亦恩を知る　伴　蒿蹊
春秋のあそひ　貝原　益軒
三井寺の古鐘　瀧澤　馬琴
修業の心得　松木　直秀
さまぐ\の生業　柳澤　淇園
學問行實　菅　茶山
鬼に癭とられたる話　貝原　好古
手づま　橘　南谿
王安石　石川　雅望

陶侃の母　中村　惕齋
長崎孝子の復讐　松井　輝星
奢侈ハ亂世のもとゐ　雨森　芳洲
寢覺の床　貝原　益軒
犬猫を愛して人を愛せざるものあり　柳澤　淇園
恩仇常ならず　伴　蒿蹊
吾が邦ハ婦人多し　荻生　徂徠
自然の樂　貝原　益軒
海泥二鰍の談　榊原　芳野

自暴自棄の戒　伊勢貞丈
はぶ　伴蒿蹊
本朝の三忠　篠崎東海
淫祠の事　中井竹山
孔門弟子　會澤安
狸の腹つゞみ　柳澤淇園
畚男某の義勇　伴蒿蹊
孝子彌作　安藤爲章
靈龜　岡田挺之
豪將琵琶に泣く　室鳩巣
世俗の怪談すべて實ならず　貝原益軒
猿の情人にちかし　伴蒿蹊
隱居　柳澤淇園
奇異　瀧澤馬琴
無益に時を失ふこと勿れ　貝原益軒
鸚鵡石の記　伊藤東涯

標目終

普通國文上の巻 前篇

佐藤定介 同輯
畠山健

四の樂

貝原益軒

榮啓期の三樂
莊子云、孔子遊泰山、見榮啓期鹿裘帶索、鼓琴而歌、孔子曰、先生何為樂、曰、天生萬物、惟人為貴、吾得為人、一樂也、男貴女賤、吾得為男、二樂也、生有不見日月、不免襁褓者、吾年九十、是三樂也
康節ハ、邵康節にて、北宋の人なり
死ぬる 上に、ぞのやか等の係辞なき時ハ、死ぬといふが常格なり。されど、又、おもき方に用ふ

榮啓期が三の樂ハ、人となり、男子となり、いのち長きをいへりしハ、まことにさる事なり。今の世の人ハ、此の上に、又、大に樂しむべき事ひとつあり。これを志りて、人ごとに樂しむべし。其の樂しむべきハ何ぞ。大君の御恵によりて、斯る太平の

る時ハ、右の係辞なきも、死ぬるとやうにいふ事あり。こそも、即それなり。但、これハ、上に、ぞもの係辞なき時に限れり、こころすべし
白浪の立田山云々 古今集に「風ふけバ、沖つ白浪、立田山、よハにや君が獨こゆらん」とある歌によりて、句をなせるなるべし。さて、後漢書に、賊を白浪といふとも見えたれバ、この歌なるをも、其の意にとりてにや

御世に生れ、堯舜の仁にあひて、白頭まで干戈を見ず。是大なる樂にあらずや。康節の、世を謝せし詞に、「太平の世にうまれ、太平の世に老い、太平の世に死ぬる」といへりしハ、誠に、大なる幸なり。今の世の人、皆志かり。亂世に生きてハ、朝夕兵革を事とし、或ハ、難をのがれさけて、身のおき所もなく、山にも海にも、白波の立田山、夜半に、ひとり行きがたきのみならず、白日といへども、同じきともがら、多くともなハざれバ、ちかき所だにゆきかへる事やすからざりしとなん。老いても、身の

やすからざりし こそも、上の死ぬると同格にて、上に、ぞのやう等の係辞なき時ハ、きと結ぶが常格なり。ことに、今ハ、上の生れてハとあるバ文字をうけたれバ、必きといはでハ叶ハず なほ下八丁の裏に詳なり

死なざる事をきらふと云ひしハ、古の人、亂世の苦をいへるなり。かゝる世に生れし人の苦、今よりおもひやるだにかなし。昔より、亂世ハ多く、治世ハすくなし。今の人ハ、いにしへ、兵亂の世、久しくつゞきて、不幸にうれひに志づめる事を思ひやりて、わが大君の御めぐみと、今の世の太平の樂とを忘るべからず。蓼虫ハ、からき事を志らず。今の世に生れてハ、今の世の樂を志れる人すくなし。いにしへを思ひやりて、今の世を樂しむべし

老成の言ハ侮るべからず

荒井　堯民

効あるの言かゝる所のの文字全く、漢文訓讀より誤り来れるにて、多くハ、不用なるのみならず、格もまた違へり。用ふべからず。但の文字なくて語のわちつかぬ所ハ、上に、事または者などの名詞を挿むべし

老人長者の言ハ、少壯の人情にて、これを聞けバ、迂濶なること多けれども、年の功を積みて、事とわざとを經し事おほけれバ、後日に、必志るしあり。少壯の人ハ、天質聰明の人といへども、見識終に及バざる處あり。然るを、後生の輩ハ、例して、老人のことを迂濶とす。老人ハ、其の身に試みて、効ある[の]言を以て、訓となさんとす。然るに、後生る聞くを厭ひて毀り詆る。其のその、年、やうやく長ど、事に渉ること、やうやく多きに及びて、始めて、老成の言は、佩服すべきを悟る。これハ、かの險阻艱難を、つぶさに嘗めたる後にあらざれバ、知り難し　梧坡敎諭

毀り詆る漢文の直譯なり。之をそしるなどあるべし

學問

富士谷　御杖

荀子勸學篇に、小人之學也、入乎耳出乎口。口耳之間則四寸耳。曷以美七尺之軀哉。云々、目に見たるも亦志かり。すべて、見聞きたる事、さながら用ひたらんハ、いまだ、我が物となるべからず。美味の物とても、かまずしてくらはんに、其の味、いゝ

でゝ美なるらん。たゞ一言も、よくかみ砕きて、わが物としなきて、はてのちこそ用ふべけれ　北邊隨筆

父兄訓自序

林　子平

和漢、子弟の賢良なるべき事を希ひて、異國に、孝經、論語、及、禮記の曲禮、弟子職、又は、朱子の小學等あり。本邦には、大和小學、本朝孝子傳、女家訓、女大學等ありて、弟子を教へ導けども、父兄たるものに、父兄の職分を教ふる書なし。然るゆゑに、父兄たる人、面々の子弟を教へ導くすべを知らずして、弟子を育つる故、弟子たる人、多くは、無頼無作法に育つなり。此の故に、其の子も無頼、其の孫も無作法なれば、續きて、曾孫も玄孫も、無頼無作法なり。是の故に、世に、孝悌忠信をしれる人少きなり。故に、五倫壞亂して、見苦しき家族、世の中に多くあるなり。小子、之を悲しみ憂ひて、今、新に父兄訓を作りて、世の父兄たる人に、子弟の教へかたを示すなり。父兄たる人、この書をみて、子弟を教ふる爲便(すべ)をしりて後に、子弟、漸々に、孝悌忠信をしらば、多しるべし。世上の兄弟、多分、孝悌忠信をしらば、多

分の中にも、俊秀賢良の上才出現して、俊秀賢良の人、世の中に多くなるべし。況、其の次なる者をや。斯の如くならバ、無頼放逸の風俗一變して、忠孝文武の業、當世に盛なるべし。小子、此の事を希ふゆゑ、あへて、忌諱を憚からずして、父兄訓を作る。父兄たる人、小子が直言を咎むる事なく、此の書を服膺して、子弟を教へ、子弟をして孝悌忠信ならしめバ、萬々世永々、孝悌忠信の世となりて、父兄ハ、子弟を怒らず、子弟ハ、父兄を恨みずして、めでたく、此の上もなきこととなるべし。父兄たる人、これを思ひ、これをつとめよ　甘雨亭叢書

知をひらくハ學問の効　貝原益軒

およそ、人の不孝不忠、もろもろの惡を行ひ、慾を恣にし、身をほろぼし、家をほろぼすに至るハ、何にかよれる[や]知なければなり。又、善を行ひて、家を興し、身をたもち、譽を得るハ、何の故ぞや。知あればなり。知あれバ、よく善惡をしる。善のなすべき事を知りて行ひ、惡のなすまじき事をしりて行ハず。この故に、知ハ身の内の大なる寶なり。學者、道に志さバ、知を求むるを第一とすべし。知を

何にかよれるやこのや文字用ゐずしてさてハ下の何の故ぞやのやハ事なけれど、かゝの文にてハおなじく刪る方句の調よろし

まじき　上に善のなしべき事を知りてとあれど、こゝもなすべからざる事とせん方穏なるべし

せんバ正しくハすべといふべし。但こゝハ

下成り難しと現在に結びたれバあらされバとあるべきなり。あらされバえあらさる時えの意なり

遊びハ自動なり。こハ他動にいふべき所なり

ひらく事ハ、學問の功にあら［ぜん］（ざれ）バ、成り難し　大

和俗訓

幼兒の養育　雨森　芳洲

をさな子をそだつるみちハ、はひまハる時より、むしろの上におきて、心のまゝに、はしりまハらせ、足既にたちたる時ハ、心しだいにはしりまハらせ、「をさな子ハ、襦袴をきぬにせず」といへる教に從ひ、きるものハ、うすきかたにし、風にも日にもあたりて、そとがちにあそ［び］（ばせ）、食物ハ、すぐるこそハあしけれど、おほかたる、其の心に從ひてこそ、病もなく、すこやかにおひたつべきに、富貴乃家にうまれし幼子ハ、傅（かしづき）もりなどい［へる］（ふ）も乃、夥しくつきそひ、御風もやひき給ハん。御はらもやそこねさせ給ハん。又ハ、御けがもやなどいひて、やハらかなるものを、幾重もきせ、食物ハ、秤にかけなどして、はひまハる時よりはじめて、抱きすくめて、御うちがちにのこすれバ、足のはたらきも、おのづからおそく、内やせ外脆く、思ひよらざる病おさかりて、そだち難きのこ多し。くはしくハ、いふに及［ぶべき］（をず）。乳母もり、又ハ、かしづきまで、斯

いふに及ぶべき上に、る又ハやの係辞な

き時ハ、かくハいはれず‖もある方、たりぬるをバ補ひつ

ゆゑん正しくハ、ゆゑといふべし

くハすまじき事とおもへる[も]補あれど、もしハ、御いたみありてると、其の身の事のミおもひて、いひも出ださず。或ハ、おろかにして、上つ方の御子を、下ざまとハ違へりと思ふもあり。人の血氣をもてうまれいづる、貴き賤き、ともに事ゝかえる事あらん[や]。ぶるき言葉の「たき哉うつくしむハ、まさに、之をそこなふゆゑんなり」といへる哉、思ひ合せて、悲しくぞ覺ゆる　多波禮具左

人ハ名よりも行にあり　柳澤淇園

女ハ、みめれ美しきが寵せられて、心の正しき哉

あまたども下に、争論絶えざりしをこ‖いひまるに縊まて死よたりといふ、ともに、過去なれば改めつ

愛する人ハまれに、物ハ、形のめでたき哉好みて、意のおもしろき哉取る人少し。ある家の妻ハ、美人の聞(きこえ)あ[れ](りしか)ども、妬む心ふかくして、夫の放埓なるをいきどほりつゝ、常に、争論絶えざりしが、ある時、妬のあまり、夫の留守に縊れ死またり夫も、大酒の爲に、吐血して身まかりぬ。妻の名を壽(とし)といひ、夫を福太郎とよべり。人ハ、名よりも行にあり。松竹に、千とせをいもひ、鶴龜に、よろづ代を比したりとも、ならぬ家を治むるハ和合にあり、長生ハ養生にありと知るべし　雲萍雜志

下部を使ふにも仁愛の心あるべし

中村惕齋

地下のさふらひ、庶民の家などにめし使ふ下部ハ、極めて下種なるが、衣食のために使ハるゝなり。もし才ある者あれバ、自世わたる故につかはず人の奴となりて、才ありと見ゆるハ、大やう悪にさとき者なり。にぶきハ、忠信に近き所あり。其のする事の、はか〴〵しからぬに堪へて、にぶき方をとるべきなり。もし、婬亂、偸盗、讒言などのことあらバ、かりにも許すべからず。其の外ハ、大めに見なかして、心ながく使ふべし。されど、上下の分際ハ、士庶の家にも、あきらかなるがよし。主ハいふにもおよバず、その子、むすめの子の、志もべとまでをゐて、なめげに、物いひつぶやきなどする、いとわろきならひなり。是によりて、亂行もみちびかれ、讒口も行ハるゝこと多し。深く戒しむべし。然れども、かれ賤しとて、みだりにかろしむるハ、いよ〳〵わろし。むかし、陶淵明が、子に宮づかへしける時、ふるさとのたえ（ど）〴〵しからんを思ひやりて、力者一人、子のかたへ遣ハしける文

なめげハ無礼なる状をいふ。但こハ通語にあらざれバ、おろかしくハ礼もなくなどいふ方、解しやすし

たえ〴〵し文意解しがたし。たど〳〵しなるべし。たど〳〵しハ、おぼつ

かなき意なり。これも通語にあらず。ふるきとのおぼつかなからん事をおもひやりてなどすべきか

なんの下、いひたるなどの語を含めたり。かゝる詞、常に用ふべきにあらず。よく心せよといふなどあるべし

を下の生まれつきてハ、自動なれバ叶はず

たのめハ、たのませなり。ハ、たのみとい

に、「汝、朝夕の事にたへがたかるべしとて、此の男をやりて、水薪の手を助く。これも亦、人の子なり。よく心せよとなん」いふ心を、わが、汝を思ふやうに、此の男の親もまた思ふべけれバ、いたハりて使ふべしとなり。（中略）心なき志づの奴を使ふにも、愛の心をわするべからず。それが中に、たまたま忠信の心を（の）生まれつきて、わが子かたふをおぼえ、劣るまじき程のものあらバ、深く心をうけて、おのがたすけに用ひなし、子弟のまもりにもさだめめ（み）おくべきなり　花ぬめかゞみ

ふべき所なり

むかひに」て云々ハ、むかひえて地にはなてども、さやうにいはん方、簡便なるべし

牛馬亦恩を知る　伴　蒿蹊

過ぎし癸丑の歳七月廿二日、攝津、高槻の近邑、農家の男兒、纔六歳にて、馬を追ひて、城下に出でゝ歸るさ、道なる川に、水出でゝ渡るべかりしかバ、いかゞふせんと見をりける間、暮にせまりて、雨、いよいよよそげしけれバ、人かげもなし。童、大に叫び歎きしかバ、馬、やがて此の子を啣へて、やすやすと川を渡り、むかひにうつして、地にそなつといへども、闇夜に、雨、篠をつくが如くなれバ、行くべき方もしらざりしに、馬また、先にたちて歩みけれバ、童もな

くなく綱を取りて、つひに、故なく我がやどにか
へりたり。迎に人を出だしたれども、馬は、間道を
帰りたれバ、逢ハざりし（き）。さるに、ことなく帰りて、
しか〴〵のよし語りしかバ、家こぞりて、限なく
よろこび、先、馬をもてなし、明くる日、餅を擣きて、
其の邊の家々へ配りしが、其の隣へ行きたる士（さむらひ）、
その日、聞きて語られし趣なりとぞ。凡、牛馬ハ、人
の勞をたすけて、世の爲、有益の物なること、他の
獸にまされり。踈にあつかふべきかは、牛も、舊主
を見しりて、涙を流し、話、既に、續畸人傳の評に

心をそめける上に、人ハとあり。「り」といはでハ叶ハず

録せり。智も亦、人よりちかし。老いて用ふる所なし
とて、餌取の手に委ねて屠るなどハ、その情牛馬
におとれり　関田耕筆

春秋のあらそひ　貝原　益軒

もろこし此人ハ、一とせの内、殊に、春をめでゝ、ふ
みにも、春を賞せし詞多し。わがくにの人ハ、昔よ
り、秋に心をそめけ（る）り。此のあらそひ、いにしへ、わ
が國の人、ふミにもおほくあらハせり。春秋のこ
とわり、陰陽異なれど、其のけしきハ、いづれも、す
ぐれてめでたければ、此のあらそひを、いみじき

賢哲といふとも、わかちがたかるべし。況人の心、同じからざる事其の面の如くなれバ、其の本性の好(このみ)によりて、春秋の劣まさりなりぬべし。わが輩の心も、時につけつゝ、うつりゆけバ、いづれをまされりと、さだめがたし。花もみぢのちれるも、いづれまさりてをしとハ云ひがたし　樂訓

三井寺の古鐘　瀧澤馬琴

三井寺の鐘ハ、古くミゆ。浮屠の説ハ、信ずるに足らず。辨慶が、叡山に引きあげたりし時、すれて、鐘のいぼ、とれたり□(き)といふ跡あり。おもふに、この鐘、久しく、水中に埋れありしものにて、自然とすれ損じたるにやあらん。又、大門のうちに、辨慶が陣錡といふものあり。凡、湖水の眺望、三井の山上よし。しかれども、志賀越の、眼下に見おろすにも、およバず　羇旅漫録

志賀越ハ西京より、如意が嶽といふを越えて、近江の滋賀に出づる道なり

修業の心得　松木直秀

何事によらず、業に就きてハ怠るべからず。成効を急ぐべからず。唯、常に心をこゝに存すべし。成効に急なるときバ、退屈の念生じて、事遂げ難し。業に就きて怠らざれバ、面白ミ、其の間に生じて、成効

大工左官の如き　如きハ、ものゝかたち状にあるをいふ形容詞にして、たとへバ、花ハ雲の如く、月ハ雪の如し、又、雲の如き花、月の如き雪など、いふにもいへるが如く、俗に、ヤウニまたヤウナなどいふ意に用ふるが常なるを、たゞ、如きといふ時の、みだりの意をとらず、などたぐひの意に用ひて、一の名詞とハなしたるなり。これも然り。こハ佛書の譯讀より、轉化し来れるものなりとぞ

の全を致すべし。學問の道ハ、事業の中にても、最難きものなれバ、最此處に、心得なくバあるべからず。然るに、學生の常として、はじめの程ハ、隨分、能く勉強すれども、やうやくにして、退屈の念を生じ、其の甚しきハ、終に廢學するにも至る者あるを、畢竟成効を望む補事の急なるに因るなり。大工左官の如き、卑近の業すら、なほ且、數年の年季を入れて、これを修むるにあらざれバ、其の大工なり、左官なり、一人前の職工とハなる事を得ざるにあらずや。まして、人の人たる道を修め、士大夫の師表たるべき學問の道にして、さも、容易に成就すべきものならんや。元來、人の精力ハ、限あるものなれバ、非常に勉強するハ、却りて、非常の怠惰を生ずるもとゐともなるべし。故に、非常の勉強を要せず、眠食常を失ふことなく、職ある者ハ職に從ひ、産業あるものハ産業を治め、さて後、暫時にても暇ある時、心を專一にして修學すべし。朝に温めて、夕に冷すこと勿く、昨ハ勤めて、今ハ怠ること勿く。かくの如くにして、日々に變ずることなく、月を累ね、年を積みてやまざらんには、

の如き快からバ。なすべてなどの字に換ふる方優れり

勉むるに於きてえわづらはし。勉むれバにて足れり

取りぬるハ過去の辭なりけれバ、たゞ其の事を叙したるなれバ、取ると

餘業に學ぶ者といふとも、成學の効驗、あらず見るべきなり。事業中最難しとせる學問の道にして、すでに然り。然らバ、其の他の事の如き、此の心得を以て勉むるに於きては、何事かなし果さざらん[や]　琴園漫録

さまざまの生業　柳澤淇園

木曽の山中など深山幽谷にて、岩茸を取るにも、ふぢといふものを造りて、綱をつけて夫ハそれにいりて、其の妻、木々の枝よりさげて、つりおろし、引き上げなどして、谷間の岩茸を取[りぬ]るとぞ。下ハ幾丈とも限知られる所なるよし、見し人物がたりなり。もしあやまちて、綱のきれて落ちたらんにハ、命なかるべし。又伊勢の浦にて、あまの蚫とるにも、乳のみ子なんど引きつれて、夫ハ櫂をつかひ居て、舟もやひするに、妻ハ、海底に飛び入り、さかしこ、貝を求むるうちに、子の乳を尋ねて、よゝと泣く聲の、水底に聞ゆるにぞ、今ひとつ得まく思へど、子の泣く聲の聞ゆるにひかされて浮びいで、舟ばりに取りつき、息もつきあへず、子に乳をそふる[補その]有様、哀にして、實に惻隱

いふべきなり

なんどなどといふ方正し

子の泣く声の聞ゆるの九字ハ、その声の三字に改むる方優れり

その上の聞ゆるにぞとあるぞ文字ハ、このそふるにて結ぶべきなり。さてハ下たゞ有様とありて、語をなさねバ補ひつ

の心も發動すべし。世さたるわざ、ほまじくなる中に、かゝるすぎはひする輩もあるものを家にありて、其の日を樂に過しつる身は、いかであり難き事にあらずや　雲萍雜志

過しつるといふときは、過去となるなり。もしは、現在にいふべき所ぞ

學問行實　菅茶山

凡、大なる物を立つれば、小なるものは、夫に從ふ。學問の第一は行實なり。其の行を先として、聖經の歸趣を求め、時論に應じて、道を衛り、異なるを闢くを勤むるは、學問の大處なり。宋賢の業これなり。今時の人、訓詁文字の異同を正すを事とするは、小なるもの從ふなり前に、諸君子なくんぜ、老佛の盛にして、後の學者、これを闢くに、暇あらざるべし。大處、既に明なれば、今時、小處を捜索するも可なり。されど、其の行實を心とせざるは、今の人の、目の著かはるか。抑、自棄して小成に安んぞるか。疑ふべきなり　筆のすさび

なくんば正しくは、なくばといふべし

安んずる正しくは、安くするといふ。輕んず重んずなども同じく、輕くし重くすといふぞ正しき

鬼に瘻とられたる話　貝原好古

宇治拾遺物語にいへるは、昔、ある人、山路に行きくれて、側なる朽木に、一夜をあかせり。夜半ばかりに、鬼の様なる人、大勢集り來たり。かの人、これ

額にありたる瘻
たゞ額の瘻とい
ひて足りぬべし

を見て、いとおそろしき事におもひけり。暫くありて、鬼ども、酒宴を初めて謡ひ舞ふ。彼の人、おもしろく思ひて、おそろしき事をもうち忘れ、酒宴の座に交りて、鬼と共に舞ひうたふ。夜も、やうく明け方になりければ、鬼ども、かの人に向ひて曰く。汝重ねて来り遊ぶべし。約束を違ふる事なかれとて、彼の人の額にありたる瘻を、質にとりてさりぬ。かの人、悦び家に帰り、しか〴〵の事をはなしければ、人々聞きて年久しくありし瘻をとられしこと、仕合なりと悦びあへりけり。彼の人

けるこそこゝも、
重き方に見て違
ハず
おもへるハ、おもひ

の隣に瘻ある人、此の事を聞きて、うらやましく思ひ、件の朽木の中をたづねゆき、一夜を明しければ、案の如く、夜半ばかり、又鬼ども来り、始の如く酒宴し謡ひけり。隣の人其の中にうち交りて遊びければ、鬼ども見て、悦びて曰く。汝、約束を違へずして来れり。定めて、質物を取りにかへさんためなるべし。今、汝にかへすぞとて、ふところより瘻を取り出だし、隣の人の額になげつけければ、瘻の上にこぶを重ねて、なく〳〵、家にかへりけるとぞ。是、まことに、世の人の富貴利達をうらや

てあるハの意く。ら〻ハおもふハといふべき所なり。下にも多し
‖癡人の面前云々聞えぬことゝなれ。
‖夢を説くに異ならぬなどすべきり
‖付くにてハそこにて断るゝ故下語

み、其の身に生れつかぬ幸を、求むるものゝ戒となるべし。誠に、此の事ありとれも[へる]（ふ）ハ、癡人の面前に、夢を説くなり　譴艸

手づま　　橘　南谿

余、江戸ふ在りし頃、さる諸侯の座にて、手づま品だまといふ藝者を召されしを、拝見せしことの有りしが、甚上手にて、目を驚かすこと多かり[し]（き）。重箱を持ち出で、三方に乗せ、内を改め、さて水を取りよせ、其の水を、重箱の内ふ入れ、短き竹に釣針を付[く]（け）、かの重箱に下し、魚を釣る體をせしふ、やがて、三寸許の鮒を釣りあげたり。これ許にてぞ、酒の肴に不足なり。何ぞ（なに）[の]（補）青物を作り出だすべしとて、かの、重箱の水を捨てゝ、其の中に、砂を入れ、菜種を取りよせ、重箱の中に蒔きて、また、重箱を、三方の上におき、風呂敷をかけて、しばらくして、もはや、生え出でたるべしとて、重箱のふたを開くに、件の砂中に、二葉の青菜充分に生え出でたり。是をつみ取りて、吸ひものにすべしと命ず。又、紙をもみて、掌中に握れバ、雀の玉子となる。其の玉子を、暫く掌中に暖むれバ、忽、雀となりて飛

をなさバ付けとあるべきなり
‖何ぞつるひざま、甚俗なり。かゝる所ハ、一の名詞となるなれバ下に、必の文字あるべきなり
左慈字ハ元敬、三国の時の人にて、道術を學び、よく鬼神を役せり。纐盃の

術云々ハ、嘗て曹操と飲せし時の事なり

び出づ。其の外、奇妙の術、數々、目を驚かせり。能く聞くに、皆、手づまにて、幻術の類にはあらずとなり。唐土の左慈が、盃を飛ばしける術も、奇とするに足らずと見ゆ　北窻瑣談後篇

王安石　　石川雅望

王安石の新法　王安石ハ、神宗の時の人なり。青苗法、均輸法、保甲法、大學三舎法、市易法、保馬法、方田均税法等を、新に定む

宋の王安石ハ、新法といふものをたてゝ、其の世の民をくるしめたり[し]（き）。されど、今の世にも、かれがつくれる詩文章のたぐひを、物に志るして傳ふるぞ、いかなる事にか。かゝる、罪ふかき人の手になれるものは、やき失ひて見ざらんこそ、道をたふとむ人とハいはめ。かゝる悪人のこゝろよりいでゝ、書きおけるものを、なつかしげに、寫し傳へなどせるハ、倭人に方人せるやうにて、くちをし。師直が歌の、風雅集にいりたるに、めさむる心地せるを、まして、安石がかきおける詩文のたぐひ、道志りたらんものゝ、めでつべきものかハ　ねざめのすさび

風雅集二十巻あり。貞和年間花園天皇御自撰の歌集なり

陶侃の母　　中村惕齋

晋の陶侃が母、湛氏ハ、其の父の妾なりしが、父終りてのち、家貧しかりければ、母うみつむぎして、

あぢきなくハ不興に感ずる意なり

朝夕をわたらひ、陶侃を、もり養ひけり。常に、子の為に、まさりてかしこきともをえりて伴はせければ、遂に、世のうつは物となりたちぬ。ある時、范逵といふ才人、鄱陽より、陶侃をとひきて、夜ひとよ、やどる事のありけるに、馬ひきいきたれども、かふべき秣なし。雪さへ、いたくふりければ、母、いとあぢきなくて、ねやに志きたる、あたらしきむしろをとりいで、みづからきりて馬にかへり。又其の髪のたけにも餘るばかりなりつるを、ふつと切り落して、ちかきあたりにもてゆき、物にかへきて、酒さかないとなみ、薪もなかりければ、柱をそぎわりてたき、とかくして、其の夜のまれ人をぞもてなしにける。後に、范逵これを聞きて、賢なりな。母。此の母にあらずば、此の子をうまざらんと、いと深くめでゝ、陶侃をつかさにすすめ擧げゝり。陶侃、わかゝりし頃、ある川の河長となりて、魚をとる、やなを守りける時に、ひとつの瓶に、魚のすしをつくりいれて、母の許に贈りやる。母其のまゝにて、文そへて返しけるやう、云く。「汝これによろこべとてこそはたびつら

河長ハ地方の小官なり

たびつらめハ、たまひつらめなりかゝる語、今普通に用ふべきにあらず

ゆゝしきハ甚しき意なり

おほやけ物わたくしにもちひらるゝ事、我が心にハ、なか〳〵り悲しく思ひ候へバ返しまゐらすなり」とかゝる戒によりてや、陶侃、職をつとむるに懈らずして、一方ならぬ、ゆゝしき功蹟をなしけれバ、世のおぼえ、當時にかゞやき、後に、太尉のつかさにのぼり、長沙公に封ぜられたる　姫かゞみ

長崎孝子の復讐　松井輝星

長崎に、神樂と名のる相撲の男ありけり。固より、強剛、人にすぐれ、不敵のあぶれものなりしが、享

歳前後の例によりて補ひつ

所不用なり

に上の町内を過ぐるにの小文字にひゞきて聞きぐるし

保八年の頃にや、或商人のもとに來り、何事をか争ひ出でゝ、云ひつのり、夫婦ともに切り殺して、行方知れずなりぬ。或ハ、肥後に居るなどいひけり。其の討たれし時に、四歳と二歳との男子ありしが、誰があげてそだてけん。延享の初の頃、廿一[歳]（補）と、十九歳とになりぬ。かぞへぬる事なれど、それが子と、知れる者ハ少なかりけ[る]（り）。一日、弟なる子、野菜を賣りて、町内を過ぐる[所]に、夕方なりし[小]（が）、或家より、たけ高く、すさまじき僧の出でゝ、向の家に入りけるを見れバ、かねて、人の咄に聞

神樂ならめとあれもはならめハんとせでハ叶ハずめハんの轉語なるが上にこその係辞あるが、又ども等につゞく時にかぎれるものなり。

又いふ此句同じくハ、神樂に似たりると改むる方まされり

いかなる人にや上にいかいく何等の不定名詞ある時ハ下必ずのといふがさだまりなり

いふに上ま問ひけるハとあれバ、こゝも、正しくハ問ひたるにといふべきなり」

よ語をなさねバ補ひつ

き置ける、ねらふ敵(かたき)の神樂ならめ(ん)とおもへる。されど、それと見極むべきよしなけれバ、いかにもして、此の僧のやう聞かんと思ふ中に、其の家より呼びかけて、芋を買ハんと云ふ。立ち入りてうりけるに、いと心よきさまの者なりけれバ、商家にもあハれがりて、今より後ハ、常に來れよなど、懇に云ひたれバ、茶などのみて、さて問ひたるハ、只今、此家より出でたる僧ハ、いかなる人に[や]といふ。しかれバ[よ]、かれハ、昔、此の地にて、神樂といひし者にて、人を殺して、遠く遁れし者なれど、[今]此所に來るべ[き]ものにもあらずと語りけり。弟ハ、こゝに、心落ち付きけれバ、しらぬ體にて、いそぎ歸り、さて、兄弟相つれだちて、かの宿に行き、神樂やある。見付けたり。誰がしが子、兄弟數年ねらひたりしが、時節にこそ。親の仇のがすまじ。尋常に出であへと呼バはりけれバ、心得たりと答へて、やゝ久しかりけれバ、裏へ廻りて見るに、窓を破りて、遠浅へ飛び込み、大船へ遁れんと思ひたるにや、泥の中へ陥りて、動き得ずしてくるしめり。兩人も、これを見るより、顯心もなく切りかゝり

今上に昔とあれバ補ひつ

遠浅ハ、海辺の浪際遠き所まで浅くなれる所をいふ

問へバ下に答へけりとあれバ正しくハ問ひけれバといふべきなり

賜へり下、四十二丁の裏を見るべし

て、遂に、難なく殺してけり。所の者共立ちよりて見ければ、二人ながら、十歳ばかりの小兒の服を、ひろく志たれども、猶引きやぶりて、上に着たり。いかなるぞと問へば、我等兄弟十歳ばかりの前後より、此の事を、念ひ付きて候ひしが、年經て、怠る心も出で來なんかと恐れて、其の時の服をたくはへ置き候。今日、著申し候へば、かねて、ひろげ置きたれども猶、せばくて破れ候なりと答へけり。かくて、此の事、關東へも告げられければ、褒美に銀子を賜へり〔ひ〕、猶、産業なくて、食事につかれぬら

至れりとあるハ、設けていへる所なれバ、至るといはでハ叶ハず。下皆

んとて、米拾俵づゝ給へり〔ひ〕たりとぞ　宅山石初篇

奢侈ハ亂世のもとゐ　雨森芳洲

世の中の、みだれんとする時ハ、必、所々に盗賊起ることあり。盗賊といへる〔ふ〕ハ、つねのぬす人にあらず、百姓の、年貢運上、年々におもくなり、上に訴へんとすれバ、とがめかうぶり、其のまゝにてありなんとすれバ、妻子をはごくむべき様なきより、やむことを得ず、徒黨をむすび、亂をおこすにいたれり〔る〕。それより志てハ、ちまた〳〵の變故いできたり、大藩小藩、思々（おもひ〳〵）のこゝろになり、大なる

おちず

いへるハ、いひてあるの意なれバ改めつ。下にも多くみえたり

みだきとハなるなり。脾胃そこねたる人の、百病きそひおこりて死ぬるが如く、懼るべき〔事〕（補）の甚しきなり。志かるに、年貢運上の、おもくなるもとをいへバ、上たる人の、奢るによるなり。凡、奢といへる（ふ）ハ、華美榮耀を好むばかりをいへず。其の分限に應じ、いるを量りて、いだす事を制するまつりごとなきより、大家小家ともに、常に定りたる、年貢運上のみにてハ、つくのふべきみちなく民を志へたぐるに至〔まり〕（る）。國をたつる〔の〕はじめ、多くハ、ものごと質素にして、定りたる年貢運上

いたれり下に至ると、現在に結びたれバ、いへバといへでハ叶ねバ

にて、經費にあまりありて、自然と、仁惠のまつりごと行ハれ、上ゆたかに、下やすく、めでたき世のありさまなれど、一葉すぎ、二葉すぎ、いそぢたち、百年たちさる後ハ、いつとなく、物事おもくけつこうになり、おぼえず、分限の外にいで、下を虐ぐるに至〔れり〕（る）。一事をあげてい〔はゞ〕（へバ）、器物など、はじめハ、素器を用ふれども、いつとなく彩畵を加へ、またいつとなく金銀にて装ふに至る。衣服も同じ。はじめハ、木綿を著、いつとなくつむぎとなり、又、いつとなくきぬとなり、それよりしてハ、緞子

すくへるハ、すくひてある意なり。かゝれバ、すくふといふべきなり

ぐんちうなどいへる、もろこしのものをたふとび、又ハ、羅紗猩々緋などいへる、蠻國の品を用ふるに至れり。かゝる類、一事ならねバ、いかでか入る物の數、いづる物の數相つくのふべき。其の間にも、奢を禁ずるこゝろ、まつりごとの要なれとしかる、明君賢相なきにしもあらねど、おほかた、小事、小物にのみ心を用ひ、大事、大物の、いつとなく分限にこえたりといふに、心づきなゝれバ、禍亂をすくへる益とハなりがたし　多波禮具左

寢覺の床

貝原益軒

上松の民家八十ばかり、此の邊の景殊にすぐれたり。町より少し行きて、諏訪大明神の鳥居あり。それよりさきに、寢覺のちや屋あり。上松の町より、此の茶屋まで、十四五町あり。半里にハ近し。茶屋より、わき二町程西へ行きて、臨川寺といふ禪寺あり。其のうしろに、浦島がつりせし寢覺の床あり。寺よりみゆる岩間をつたひて、ねざめの床にくだる道あり。其の道はなはださかし。ねざめの床ハ、木曾川のきはにあり。大なる岩なり。岩の横十間、長四十間ばかりあり。其の高き所に、辨才

天のちひさき社あり。其の一段ひきゝ石の上、平なる所、とりわきてねざめ乃床といふ。其の大岩の、岡の如くなるもの、幾許といふ事をしらず。其の上、平なり。東の方ハ、河原の如くにて大石あり。水なし。西ハ、木曽川ながる。ねざめ乃床の大岩ハ、西の方、木曽川にのぞみて、其の石岸、屏風を立てたるが如し。むかひにも大岩あり。兩岸の間、水のはゞ二間或ハ三間、瀬ありて、瀧の如くこなぎりながる。大河をくゝる如く、せばくながるゝ故、ふかき事はかりがたし。其の兩岸のせばき所、長五十間ばかりなり。上の水の落ち口の岩を、上﨟岩といふ。河中に、まな板石とて、一の石あり。川むかひの大岩の上に、三の穴あり。一の大なるを大釜と云ひ、二の小さきを小釜と云ふ。皆、そらにむかへり。むかひに、屏風岩とて、屏風を立てたる如くなる岩あり。向の大岩の下のはしに、たゝみ岩とて疊の如くなる岩あり。又、烏ぼし岩とて、烏ぼしに似たる岩あり。其の前に、川のこなたに、平岩あり。平岩の上に黒岩あり。其の黒岩を象岩といふ。川むかひに岩山あり。其の山に、檜、樅、栂、松などしげ

浦島子の事、世俗たゞ浦島と呼べども、浦の島子と云ふ方、正しきにかなへり
浦島子の蓬莱に遊びし事ハ、雄畧天皇紀二十二年の條に見えたり

りてうるはし。およそ、此の地ハ、他所のすぐれたる、風景にもたえて、奇妙なる風景なり。いつくしく潔きこと、心にしるしがたく、詞にものべがたし。浦島が事、日本紀、雄畧帝紀、并に、扶桑略記に見えたり。此の地に至りし事ハ見えず。又、むかし、木曽のねざめ乃床に、三歸の翁といふものありて、長生の藥を、人にあたへし事を、三歸といふ世俗の謡に作れり。又、飛雲といふ謡に、木曽山中にて、み熊野の山ぶし、あやしきものにあひたりしことを作れり。慥なる書にみえざれバ、二ながら信じがたし

木曽路之記

うたてし　この詞ハ、もと、うたて

犬猫を愛して、人を愛せざるものあり

柳澤淇園

犬猫を、ふかく愛するものハ、大かた、人にハ、情愛のうすきものなり。貴人ハ、わきまへあれど、さやうの方とハあらねども、下司にハ多かり。飼ものに、不便を加ふるほどならバ、人にも、情ハふかかるべき理なるを、かへりて、ちもなきハ、心底、世にもいこうたてし。東海道を通りける頃、予が宿りける驛亭の妻ハ、狆を愛すること類なく、飲食

といふ副詞の形容詞となりたるなり。うたて〔うたて〕といふハ、ものゝ甚しくあるをいふ詞ながら、うつりてハ、たゞうたて又うたてしなどいひて、歎き方にのみ用ふる事となれり。こゝもその意なり

こもに、狆に口うつしてあたへ、他より、食物などもらひたる時も、主人に聞えもせずして、まづ、狆にあたへて後に、人にも食ハせけり。主人も愚昧にて、かゝることを、妻にも許せバ、狆に對して、ものいふこと、あだかも、人に對するにおなじ。これにより、あたりの者、この妻に化名して、狆のかゝとぞよびける。其の妻、おのれが子なければ、甥を養子としたれども、狆と、なからひよろしからずとて、讒言をかまへて、甥を退けしとぞ。此の甥おもふに、これを狆に見かへぬとて、詫もせで、再、

花子ハ、乞食を云ふ。もと、化子にも作り、叫化ともいへバ、化子ぞ本字

家にかへらバ、人〻なつたへ聞きて、ひらに、子となるべき者もなく、其の家、つひに絶えにけり。この妻、養子を愛しけるほど、狆の如くせバ、其の家、ながくさかえたらんを、愚夫愚婦の所爲、邪路におもむけり。斯る類、世にいと多かり　雲萍雜志

恩仇常なし　伴蒿蹊

近江八幡にて、もとありし事とて、人の語りしハ、醉人、もろ肩をぬき、劒を廻して、過ぐるものあり。花子の長、非常を見めぐる者、ある家の門にて、みつけて、此の劒を奪ハんとす。醉人ハ、とられじと

なるべき
すまふ　相争ふ意
なり

すまふ間、みるもの、堵の如くなれバ、彼の家のあるじ出でゝ花子の長を叱りて、吾が門を塞げて、何とするぞ疾く、他所へ引き連れゆけといふ。長いらへて、無理なる人かな。かく、危き劒の下にて、我が心にまかすべきものかハといふに、家あるじ息まきて、花子の身をもて、無礼なることをいふものかと、握(にぎり)こぶしをもて打たんとす。長も怒りて、我ハ、其の花子を治め、はた、かくやうの非常を防ぐが任なり。貪者の身をもて、吾を花子とやはいふべきと、是も棒を引きそばめ、打たばうた

うたんずにては、下の勢といふ語につゞかざれる文字補ひつ

んず〔補　る〕勢なり。其の間に、酔人ハ、本性になりて、劒を室にし、肩をはしいきて、彼の争ふ中に入りて、はしもなきことに、さハ争ふものかハと、あつかふを見て、つどへる人々、みなよみしけりとぞ。つらつら思ふに、本末混じ、恩仇定なき事、乱世ハ論なく、治世といへども、人間の波瀾かくの如し。一隻眼を豁開して、これに觸きば、傍観せずバ、劒樹刀山俄然として、脚下に現成すべし。危きかな。おそるべきかな　閑田耕筆

吾が邦ハ婦人にほし　荻生　徂徠

吾邦ハ、女多く男すくなしといふ。さもあるべし。女の生るゝハおほく、男のうまるゝハ少し。人の妻女の死にたるをきく事、しば〳〵なり。人別の帳といふ物を見れバ、誠に女がちなり。されども、陽ハ少く、陰ハ多きものなれバ、異國もかくあるべしと思ハる。女少かりせバ、世ハ、みだるべきなり　南留別志

自然の樂　　貝原　益軒

内の樂を本とし、耳目を以て、外の樂を得る媒として、其の欲になやまされず、天地萬物の景氣のうるはしきを感ずれバ、其の樂かぎりなし。此の樂、朝夕つねに、目のまへにみち〳〵て、あまりあり。これをたのしめる（む）人ハ、すなハち、山水月花のあるじとなりて、人に、こひ求むるに及バず。たからもて買ふにあらざれバ、一錢を費さず。心にまかせて、擅に、とりて用ふれども、つきず。常に、わが物としてまゝすれども、人いさハず。いかにとなれバ、山水風月の佳景ハ、もと、定まれる主なければなり。かく、天地の内、きハまりなき樂をしりて、たのしめる（む）人ハ、富貴の驕樂をうらやまず。其の樂

「たのしめる」ハ、たのしみてある意にて、過去より現在にわたる辭なり。「たのしむ」ハ、たゞ現在にいふべき所なり
「いさハず」ハ、争ハぬ意なり

快しといへどよゝたとへバとあそバしても必快からんと未来にいふべき所なりちれるが如しもなおすべし

富貴にまちきバなり。此の樂を志らざる人ハ、樂しむべき事目のまへに、常に、みちくヽて多けれど、其の樂を志らざれバ樂しまず。世俗の樂ハ、其の樂、いまだやまざるに、えやく、わが身のくるしことゝぞなるだに。たとへバ、味よき物をむさぼりて、恣にのこくはず、はじめハ、快しといへどもやがて病おこりて、身の苦となるが如し。凡、世俗の樂ハ、心をまよはし、身をそこなひ、人をくるしましむ。君子の樂ハ、まよひなくして、心をやしなふ。外物を以ていちず、月花をめで、山水を見、風を吟じ、鳥

いさむる心禁ずる意なり

をうらやむ類、其の樂淡けれバ、終日樂しめども、身にわざハひなく、人のとがめ、神のいさむるこざに非ず。此の樂、貧賤にしても得やすく、後のわざハひなし。富貴の人ハ、其のをごり、をこたりにすさみて、此の樂を志らず。貧賤の人ハ、此の二の失すくなし。志だにあれバ此の樂ハ得やすし

訓 樂

海泥二鰍の談　擬歐州讀本

榊原芳野

十月、江南、天氣よきに乗じて、一隻の海鰍、濱邊に

逍遥し、覺えず、下總、行德に至れり。歸るを忘れて、漁父に獲られ、兩國の中洲に安置せらる。河中の泥鰍、これを吊ふ。海鰍歎じていはく。我と汝と同名なるを以て、厚く吊はる。然れども、汝は、卵生にして、淡水に産れる魚屬、我は、胎生にして、鹹水に育する獸類なるは、近來、人間も、亦知れる所ならずや。然るに、汝は、泥字を加へ、我は、海字を加へて、等しく魚類とす。物を辨ぜざること甚し。泥鰍笑ひて曰く。請ふ、岸頭の酒店を見よ。招牌上に、くじら汁どぜう汁と、並に兩行に書す。是大小の別を

久治良土長
神武帝、兄猾を討平し給ひける時の御詠に、久治良佐夜流の句あり。又塵添壒囊鈔に、土長の字を用ひたり。長のかな、チヤウにしてゼウにあらざればなり

知らざるのみならば、汝は、久治良にして、くじらにあらず。古事記、神武の御製以て徴すべし。我は、土長にして、どぜうに非ず。塵添壒囊の語、證するに足れり。已に彼が如く、その名を誤る。何ぞ其の實を識るに至らん。文明の世、猶、文盲の人多し。それこれを如何せん。海鰍冷笑して曰く。我が屬にのみ、座頭鯨あるにあらざるなりと　洋々社談

自暴自棄の戒　伊勢　貞丈

自暴自棄といふ、いろやうのいましめを聞きても、用ふる事なく、人の善事を見ても、まなばん

とも思ハず、只わがまゝにして、我があしき事を、改むべしといふ志もなく、善事ハ、我が如き者の、曾てならぬ事なりとて、わざと、我が身をすて物にして、悪事を志こそして、少(すこし)も、善事にすゝむ心なきなり。かく自暴自棄なる人ハ、人面獣心とて、顔ハ、人のごとくなれども、心ハ獣の心なり。志を起して、悪しき事を改むるならバ、などか、善人にならざらんや

貞丈家訓

はぶ

伴蒿蹊

大隅の人の話に、鬼界島、大島、とくの志まなどに、はぶといふ蛇ありて、太く長きものなり。人をとらんとしてハ、堅になりて、其の歯をもて、人の頭にても、身にてもうつ。うたれたる所、毒氣にて腐れり。手などなれバ、其のうたれたる所を切り捨つ。然らざれバ、腐(くさり)惣身にめぐりて死す。又はぶつかひといふものあり。其の嶋々にて、悪事をなせるもの、陳じて善悪わかち難き時ハ、咎ある者を咎なきものと共に、車座にして、彼のはぶつかひをよびて、はぶをはなせバ、必、咎ある者をうつとなり。常にも、此のはぶにうたるゝハ、よからぬも

死す正しくハ、死ぬといふべし。死すハ、君を弑す、親を弑するなどいひて、まことハころす意なり

交趾の象
交趾、天竺辺にて、戦争に象を用ひし事なきバ、かくいふ

千辛萬苦心をつくせり正しくハ萬苦の下にての二字あるべきなり。下の純粋の下もにての三字あるべし

のちりこゝや。然らバ交趾の象を用ふるに似たり。さるに、此の蛇を見付くれバ、必、打ち殺すといふる心得ず。人の善悪を知りてうつものならバ、正しき物といふべし　閑田耕筆

本朝の三忠　篠崎東海

我が朝の三忠ハ、大友金村、守屋大連、和氣清麿なり。後世の三忠ハ、重盛、藤房、正成なり。其の中、金村ハ、心の欲するごとく、首尾とゝのふ。守屋、智恵足らず。清麿ハ、千辛萬苦心をつくせり。志かうるに、今の人、清麿の事を知るものなし。是に次ぎてハ、正

君われをして良臣たらしめよといふハ、唐の太宗と、魏徴との問答の語なり。耶律楚材が元の人なれバ、恐らく暗記の誤ならん

華域たゞ唐土などあるべし

置かバといふときハ害

成、誠一純粋たゞ、君を思ふ心の至きる、古今に希なる人物なり。嗚呼、世の人、事なき時ハ、心をつけず、事ありて後に、やうやく知る。彼の耶律楚材が、「君われをして良臣たらしめよ、忠臣たらしむる事なかれ」といひしハ、有りがたき詞にあらずや。夷狄の人にも、かゝる信言ある事よと、そゞろに涙を催しぬ　南畝叢書

淫祠の事　中井竹山

古より、華域にて、賢君良臣の淫祠を、毀ちすてられたること、例おほし。其のまゝにさし置かバ、平

をせんとやうに未來にいそでハ叶ハず

そゞろハすゞろともいひて、心乃進みて堪へがたき意なり

西門豹ハ、魏の文公の時の人なり

山田春城ハ嵯峨帝頃の人にして文學を以て當時に聞えたり

民の害をする故なり。西門豹が、河伯の婦を娶るを禁じ、三國の時の胡穎ハ、出で、官につき、過ぐる所の淫祠ハ、皆これを焚き、唐の狄果公ハ、江南に使して、淫祀を毀つこと千七百所、宋の夏竦ハ、淇州に知たるに。淫祠數百を毀ち、巫覡世家を責めて、農とならしむなど、歴史に見えたり。我が邦にても、神の代に、素盞烏神の八岐蛇を斬られしハ、河伯の娶の類ならんを、談者其のことを神異にせるのみ。山田春城駿河介となり、一神祠の巫祝、妖言をなして國守吏民を溺惑せしをきびしく禁絶し、妖言ながく絶えたるハ、文徳實録に見え、前後にも、なか〳〵又、かゝるためしもあるべけれども、事うづもれて、傳ハらぬも多かるべし。王室の衰より、巫祝家の説、追々盛になり、ほまゝの淫祠、天下に滿ちたり。佛も、亦一種の神なり。此の二を合せてハ、數みだりもなきことなるべし。其の中にて、何の由緒もなく、瑣細なる分ハ、追々にやき毀ち、或ハやきこぼつまでハなくとも、遷徙合併しても、格別數を減じ、社人らしきものハ農に歸し〔せしめ〕、其の社地の廣きハ、直(たゞち)に、就きて耕さしむ

歸し下に耕さしむとあれど改めつ

あり上にたとひとあるによりて改めつ

べし。たとひ、由緒ハ、正しくありとも、社人の風儀あしくばまぐし、僞妄の説を造り設け、平民の大害となりたるもあ[り]是ハ、正しきを轉じて、淫祠となしたるなり。(中略)又ハ、稲荷不動地藏を祀り、吉凶を問ひ、病を祈り、因りて、醫者の方角をさし示し、或ハ、藥をやめて、死に至らしめ、蛭子、大黒を祀りて、強欲姦利の根據とし、天滿宮を淫奔の媒とし、觀音を産婆の代とし、狐狸の妄談、天狗の虚誕、聊の、辻神辻佛へ、さまぐの靈驗を、みだりに云ひふらし、佛神の夢想にことよせて、妄藥粗劑を

請ふ不用なり。もし、強ひて用ひんとならハ、下文を、懲らしめん事をと結ぶべし

終りハ自動なり。こゝハ上にをとあれバ他動にいふべき所なり。又給ふ

うり弘め、男女の相性、人相、劍相、家相を見る[の]類、邪說横流し、愚民を眩惑する術にあらざるハなし。かゝる怪妄世界、頑鈍の風俗、誠に、嘆ずべく憫むべき[事]の甚しきものなり。[請ふ]速に沙汰を加へ嚴禁を施し、將來を懲したき者なり　草茅危言

孔門弟子　會澤安

孔子、學を好みて、堯舜を祖述し、文武を憲章し、東周の道を、再興せんと志し給ひしかども、道行ハれず、四方に周游して、身を終[り]給[ふ]其の門人を教育するに、其の材の、長ずる所に随ひて、有用の

もとくハ過去にいふべき所なれバ改めつ
教授す過去にいふべき處なり
漢唐注疏　漢に、孔安國馬融鄭玄等ありて、經書に注し、唐に至りて、孔頴達等、義疏をつくれり
陸陳　陸九淵、字ハ子靜、象山と号し、陳亮、字ハ同甫、龍川と号す。共に程朱と並びて當時鼎立の評ありき
王氏　王守仁、字ハ伯安、陽明と号し、餘姚の人なり
貝原益軒、伊藤東涯、荻生徂徠なり
貢路游夏　子貢子路子游子夏なり

才徳を成就す。志を得て、東周を起さん日に、その人を用ひたらんにハ、誠に、濟々たる多士、股肱心膂となるべし。道行ハれざるに及びて、門弟子分散して、各、四方に教授す（せり）。孔門の教ハ、人々を切り揃へざる様に、一律を以てせず、司馬遷も、皆、異能の士なりといへるが如く、おのおの、其の所長を異にすれバ、其の門人を教ふるにも、其の人によりて、大同小異あり。孔門に、親炙せし人を始として、論語中にも、游、夏等の、互に異論あるなど、其の和して同せず、皆所見ありて、必しも、雷同せざるを見つべし。後世ハ、漢唐注疏の學あり。宋に、程朱性理の學あり。陸陳等一家の説あり。明に、王氏の學あり。神洲ハ、貝原、伊藤、荻生の學あり。各、一長一短あれども、其の末流に至りてハ、いづれも、務めて門戸を張り、黨同伐異、交（こもごも）相抵排して、甚しきハ、敵讐をなすに至る。是皆、其の流に從ひて、其の源を忘るゝなり。諸説紛々たりといへども、若、其の源に泝る時ハ、いづれも、同じく孔門より出でし聖人より一視する時ハ、貢路、游夏の、一門に集るが如く、いづれも、聖人の門人なれバ、相親しむ事、

可なり上に縦令合はざる事ありともとあるにかなはねば改めつ

兄弟の如くなるべし。所見ハ、各、異同ありといへども、游、夏、互に、所聞を述べしが如く、平心にして、其の言を盡し、勝つことを求むべからず。縱令、合ハざる事ありとも、口舌を以て、強ひて雷同せんことを求めず、姑く置きて、自ら、是を、聖意に質して可なり（らん）。聖を去ること、數千載なれども、論語の一書ありて、今日、諸弟子も共に、親しく、教を聖人に受くるが如し。書中に就きて、反復玩味し、類に觸れて長ずる時ハ、是を言行に施して、一として備らざることなし。然れバ、論語を經とし、其の他、後世諸儒の説く所の如きハ、是を緯として、參考に備へて可なり。後學の人々、其の身も、諸儒も、共に孔門の弟子なれバ、互に、兄弟相睦ぶが如く、縱令、異同を論辨する事ありとも、詩に、「兄弟孔懷」と云へるが如く、相爭ふ心をバ打ち捨てゝ、相謀る心を以て、其の疑を質し、孔子の諸弟子、同じく門下に在りて、相共に、腹心を開きて、講論せし時の如く、迭に、實を以て論述し、毫髪も、彼此を挾むべからず

開聖漫錄

狸の腹つゞみ

柳澤淇園

月のさやけさにつひざまわろし。さやけきにとすべきなり

三とせ過ぎぬる秋穗ならば過ぎし三とせの秋などあるべし

いへり上に住持いふとあればかくもいふとすべきなり

侍るハ、對話の時ニ限る語なれど中世より、常の文にも用ひ來りしハ誤なり」

なかりし地なりなどハかく過去にいふべき所にあらざれば、なき地なりとすべし。もし地なりの下更にきの一字を補ふべし最よく聞ゆべし

絶えてなき方優れり

狐ハ、奸智ありて、疑多き故に、かれがよこしまにひがめる性を忌みて、人愛せず。狸ハ、癡鈍にして、暗愚なれバ、人も憎まず。予、筑紫にまかりし頃、ある寺にやどりける夜、あるじの僧の、あれ聞きたまへ。今宵ハ、月のさやけさ（き）に、狸どものあつまりて、腹つゞみをうつなりといふに、耳をすませバ、其の音はるかに響きわたり、砧のおとにやあらんとうたがへバ、さもあらず。向ひなる岡のこなたに、一むらの藪ありて、他にも人家なし。狸ども、そこにあつまりゐて打つなり。住持いふ。これ、此の寺に居ること、凡、九年になりぬ。三とせ過ぎぬる秋よりして、人々、この音を聞きつけぬ。予も、いぶかりて、其の處を尋ね見しに、只、狸が栖める穴のみなりといへり。あくる日、行きて見侍るに、はたして、人家ハ絶えてなかりし（き）地なり。「太平の民も、鼓腹す」など、古語にもいへど、腹つゞみハ、めでたきためしにや　雲萍雜志

畚男其の義勇　伴蒿蹊

上野國の士人の家に、秘藏の皿、二十枚ありし（き）も、是を破る者あらバ、一命を取るべしと、世々い

ひ傳ふ。然るに、一婢、あやまちて、一枚を破りしかバ、合家、みな、おどろき悲しむを、裏に、米を舂く男、これを聞きつけて、わが家に秘藥ありて、きれたる陶器を繼ぐに、跡も見えず。先、其の皿を見せ給へといふに、皆、色を直して、其の男を呼びてみせしに、二十枚をかさねて、つく〴〵みるふりして、もちたる杵にて、微塵に碎きたり。人々、これはいかにと、あきれたれバ、笑ひていふ。一枚破りたるも、二十枚破りたるも同じく、一命をめさるゝなれバ、皆、己が破りたると、主人に仰せられよ。此の、皿陶物なれバ一々破るゝ期あるべし。然らバ、二十人の命に關るを、我一人の命をもて、つくのふべし。繼ぐべき秘藥ありといひしハ僞にて、かくせんが爲なりきと。少もたぢろがず。主人のかへりをまちたるに、主人歸りて、此の子細を聞きて、其の義勇を甚感じ、城主へまうして、士に取りたてたりしが、果して、廉吏なりしとかや　閑田耕筆

たぢろがずハ動かぬ意なり

なりしかども、重格なり

孝子彌作

安藤爲章

常陸の國、行方郡、玉造村に、彌作といふ民ありき。生質實やかにして、母につかへて至孝なりき。家

とゝのへなき方まされり

に、田産なかりけれバ、人に傭ハれて、わたらひけり。寒夜にも、衣衾なけれバ、母のねむきをかなしミて、彌作がきたる物を脱きて、母におほふに、母も、また彌作が寒からん事を憂へて、互に、相ゆづりぬ。母の言葉に背くをおそれて、もとの如くうち着て、母が、よく眠りたるをうかゞひて、竊に、たほひきせて、あとまくらをつくろひとゝのへ、彌作も、其の側にふしぬ。或ハ、炉火をたきて、母をあたゝめ、彌作ハ、火をまもりながら、居ねぶりなどしけり。人に傭ハれても、役にゆきて、他に出

と慥ならねど補ひつ

づる時ハ、隣むかひの家にゆきて、母をかへりみたまへとて、涙ぐみて、頼みつゝ出でたり。手づから、焼飯して、午餐にあたふれバ、いつもうちいたゞきて、懐に入れて、終日、人の為にはたらきながら、くらハずして、夕さりハ、家にもて帰り、母にあたへて、おのれハ、けふハ、某が酒のませ、或ハ、某がなにくれ〔と〕補くハせたれバ、腹ふくれたりといひのがれけり。母時々、頭痛の病に苦しみけるに、彌作、おのれが膝を枕にあたへて、撫でさすりなどいたハりて、いやしけり。母、魚肉をたもふ時

あさる　漁(あさり)するをいふ。又、求むる意なり

は、彌作、ちかき水邊に走り行きて、何にても、あさり歸りて味をとゝのへてすゝめける。おほよそ、よのつね、母にあたふる飲食をバ、神佛などに奉る物の如くに、きよめ撰びて、おのれハ、其の、あまりの、あら〱しく、よごれたるをたべけり。母、もし、寺院の談義を聞かまほしくいひ、或ハ、親しきものゝ方へゆかんなどいふ時は、彌作、手をひき、腰をおし背中に負ひなどしつゝ、母の面白がるべき物語などして、行き歸りけり。彌作、四十歳に及ぶまで、かく行ひけれバ、其の里人も、いとかしきものにいひあひ、郡奉行などいふ人どもゝ、傳へ聞きて、不便なる事に思ひけり。過ぎし延寶二年、西山公、御在藩のをり、たま〱、玉造へまたらせ給ひて、この事を聞しめして、御嘆賞のあまり、御馬の前にめしいでゝ、田畠黄金など賜ひつゝ、御感淺からざりけり。それより、家の内もやゝゆたかになりて、いよ〱、孝志をあつくして、同じき八年に、母身まかりける時も、奴婢をたのまず、自、醫師の方へ行き、（補）藥を誂へて、走り歸りてな、煎じあたへなど、志をつくしゝ、なき跡のかなしミ

藥をなくては聞えねバ補へつ

侍るは普通の文語にあらぬこと既にいへり。かまげりの二文字をもてこれに換へぬ

て下の殺さんとほとあるにあたれば改めつ

なゝ他人の涙をはらへおとはせなり。其の後に、妻をむかへて、農業をつとめけれバ、ほどなくして、富さかえけるにつけても、あはれ、母の、世にありし時、かくあらましかバと、よろこびたまはましものをとて、くやミなきなり。元禄七年甲戌に、六十歳なるか、世におこなひ侍る（なり）とぞ　年山紀聞

靈龜

岡田挺之

明和六年、丑八月、奥州、津輕の濱邊を、百姓一人通りけるに、大なる龜、ひつたに仰向になりて（たるを）鳥、又なにらべといふ鳥、おびたゞしく集りて、つゝき殺さんとす。龜、首を出だして、百姓を見て、たのむ有さまなりしかバ、脇指をぬきて、鳥を追ひちらし龜をたすけて、海中に入れしかバ、しばらくきて、禮をなす體にて海に入りぬ。其の夜の夢に童子來りて、告げていはく、助け給へる恩報じがたし。卜檀といふ藥の木あり。是を奉るべきまゝ、重ねて、彼の濱に來り給へと、いふと見て覺めぬ。翌日、彼の濱にいたるに、風吹き、波たちて、龜あらはれ、木の枝の如き、黄色なる物をくはへて、前に置きて海に入りぬ。すなはち、取りて歸りしに、津

天徳寺ハ佐野宗綱の弟にして、天正年間武勇の聞ありし人なり。委しく、雷澤老談記に見えたり

輕の領主、聞き給ひて、六きを見給ふに、重(おもさ)十八匁あり。五匁をわけて、百姓につかはし、醫に問はるるに、卜檀、本草にはありながら、いまだ見ざる人なし。延年の藥なるよし。此の事、近藤某の筆記に見えたり　秉穂録

豪將琵琶に泣く　室鳩巣

相州北條の幕下、佐野城主、天徳寺ハ、豪健の勇將なりしが、或時、琵琶法師を招きて、平家語らせて聞きけるに、いまだ語らぬ先に、琵琶法師にいひけるハ、其ハ、たゞ哀なる事をきゝ度こゝろあり。其

いへバこゝも上に應じていひたれバといふぞ正しき

候との詞、普通にハ、時にのみそへられ用ふれども、正しくハ、過去のある處ハ候ひきといふべきなり

の心得して、語り候へといへバ、法師、心得候とて、佐々木四郎高綱が、宇治川の先陣を語りけるに、天徳寺、あはれがりて、雨しづくを流しけり。さて今一曲、前の如く、哀(あはれ)なる事をきゝ度しといひければ、那須與市宗高が、扇の的を語りけるに、平家なりバより、天徳寺、又、落涙數行に及べり。後日に家臣の輩に、過ぎし日の平家ハ、いかゞきゝつるといふに、家臣ども、尤おもしろき事にて候。但、我等共、ひとつ意得ぬ事こそ候へ。前後二曲共に、勇烈なる事にて、憐なる方ハ、少も候ハぬに、君にハ、

賜ハる賜ふいづれも、他動の語ながら、賜ハるハ賜をうくるをいひ賜ふハ貴き人の賤しき者に與ふるをいふ。されバ、かくも皆改めつ

き不用なり

御感涙に咽バきて候。是ハ、いろゞの事にて候にやう。今に、不審なる事に何きも、申しあひ候といへど、天徳寺、驚きて、只今迄ハ、各をたのもしく思ひ候ひしが、今の一言にて、ちて〳〵、力を落して候。先、佐々木が先陣を、よく合点して見られ候へ。頼朝、舎弟の蒲冠者にも賜ハらず、寵臣の梶原にも賜ハらぬ生唼（いけづき）を、高綱ニ賜ハる（ふ）に非ずや。ちきだ、其のうひもなく、此の馬にて、宇治川を先陣せずして、人に先をさされなバ、必、打ち死して、再、歸るまじきと、頼朝に暇乞して出でたる、其の志を察

して見らきよ。あハきならぬ事ニハとて、數、涙を拭ひつゝ、志バしありていひたるハ、又、那須與市も、大勢の中より撰バきて、唯一騎、陣頭ニ出でしより、馬を海中に乗りいきて、的に向ふに至るまで、源平兩家、鳴を志づめて、之を見物するに、若、射損じなバ、御方の名折たるべし。馬上にて、腹ニき切りて、海に入らんと、覺悟したる心を、察して見らきて候へ。武士の道など、哀なるものハ候ハず。某ら、殊に、戰場に臨ミてハ、高綱、宗高が心ニて、鎗を取り候ゆゑ、右の平家をきく時も、兩人の心を思

ひやりて、落淚に堪へざりし。然るに、各にハ、憐になかりしと、申さるゝにつけて思ふに、各の武邊ハ、只一旦の勇氣に任せて、眞實より出づるにてなく、ちきにやと思ハれ候。それにてハ、頼もしからずこそ候へと言ひしかバ、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり。これ、天德寺が武邊ハ、淚より出づれバ、元より、仁者にあらねど、武の一筋ハ、仁に根ざして、惻隱の心より、發するに非ずや。然るに、武ハ、殺獲の事にて、手荒き道なれバ、言ハゞ、仁とハ黒白の違ある樣なれども、仁より出でざるハ、眞の武に非ず。況、其の餘の事ハ、尚以て知るべし。されバ、忠孝も、禮義も、文道も、武道も、内より、油然として潤ひ渡りて、發するに非ざれバ、眞の物に非ず。すなハち前にいひし、人に情あり、物の哀を知る[の]心なり。すべて、諸の言行共に、義理に當りてハ、悉く忍びざる[の]心より出でゝ、天德寺が、淚をこぼす樣にだにあれバ、うき、仁德の全きな[り]らん。仁者といはんに、何の疑かあるべき　駿臺雜話

世俗の怪談すべて實なし　貝原　益軒

世俗の語り傳ふること、そらごと多し。ことゞく

く信ずべからず。ことにあやしき事、多くハ僞なり。神佛の奇特も、俗人の語り傳ふる事ハ、そらごと多し。およそ、正法にハ奇怪なし。奇怪あるハ正法にあらず。奇怪なりとて、貴ぶべからず。神佛をふかめむとて、なきことを作り出だし、或ハ、似たる事を誠にいひなし、奇異なることを言ひつけて、かへりて、神佛の徳をけがす事を知らず。鬼魅、狐狸のしわざにも、奇怪なることもあり。それも、多くハそらごとあり。悉、信ずべからず。おろかなる人ハ、そゞろなるそらごとを信じて、迷ひやすし。

そらごとを作りて語りつたふること、世に多し。信ずべからず。妄に、人の言葉に任せて、語り傳ふべからず。人の胡亂なることを信じて、また人に語れバ、我も、亦そらごとをいふ[の]罪あり。謹みて、人にかたるべからず。　大和俗訓

猿の情人にちかし　伴　蒿蹊

兒島尚善鑿士語られしハ、京師より、丹波路を經て、播磨に歸る山中にて、うち向ふ所、物騷がしく、何ならんと見れバ、猿ども、あまた集りたるが、中に、藤かづらやうの物にてゆひたる、畚のごとき

老ひさらばひたる　痩せて、骨と皮とになれるをいふなれど、通語にあらねば常に用ふべからず

ものをするにて、かはる〴〵立ちより、菓（このみ）など與へなぐさむる程なり。内には、老いさらばひたる猿、ほのかに見ゆ。子らまでも、是につかふる[る]としられて、みづからも、母の親もなければ、こと更に感じて、かへるみちの、いとゞいそがはしとなり。形人に近づけば、其の情も亦近きなるべし。されば、是を畜ふもの、伎藝を教ふれば、馴れて、よく起舞せり　閑田耕筆

隱居　柳澤淇園

「小人閑居して不善をなす」といへども、小人ならずとも、閑居して不善をなすもの、少からず。されば、独居の閑をたのしむことは、いとかたし。大かたは、よりどころなく隱居する輩、世間に多し。自得して世塵をさけ、思ひすてゝ、身をのがるゝものは、格別にして、隱居しながら、物を貪り、世路に執着するは、隱居に似て隱居にあらず。近世は、隱宅に、標札多かるにても知られたり　雲萍雜志

奇異　瀧澤馬琴

古人今俗、奇を好まざるもの稀なり。しかれども、北越の七ふしぎ、南海の平家蟹、西海の不知火、關

を以て不用なりとも しこの文字を用ひ んとならバ下に辨せ しむるときハといハ でハ叶ハず

東の富士の農男などハ、常に、見もなれ聞きもなれし故、奇なりと志りつゝ、奇なりとせず。狗の長鳴、鶏の宵鳴、鳥の志ばなくをきけバ、驚き怪しミて不祥とし、衣に飛鳥の糞をかけらき、帯の、おのづから結バるゝ事あれバ、これを祝して吉祥とす。其の不祥ならざるも、悪ミて不祥とするゆゑに、遂に凶事を招き、其の吉事ならざるも、祝して、吉祥とする故に、終に吉事なし。「予を以て」こゝを辨ずるときハ、怪ハ時ありて吉、時ありて凶、又吉もなく、凶もなきことおほかり。堯舜の時、鳳凰來儀し、王莽が時、亦鳳凰あり、正陽門外に止りぬ。夫堯舜の徳を慕ひて來るときハ、鳳凰ハ、靈瑞の鳥なり。王莽が虐を慕ひて來るときハ、鳳凰ハ、凶惡の鳥なり　燕石雑志

無益に時を失ふこと勿れ

貝原益軒

いとけなきより、さかりに成り、老にいたり、衰へて死に至るまで、百とせの齢も、亦いく程なし。人の世にあること、假にやどれる旅人のごとし。東坡が詩に、「一年一夢の如く、百歳眞に過客」といへ

ハ〃おちつれバ補ひつ

るもうべきなり。かく、短き此の世なれバ、無用のことをなして時日を失ひ、或ハ、いたづらになすことなくて、此の世くれなん事をしむべし。常に、時日を惜み、益ある事をし、善をすることを樂みて過ぐさんこそ、世にいけらんかひ補[ハ]あるべけれ

樂訓

鸚鵡石の記

伊藤東涯

庚戌享保十五年の歳、四月十七日、駒野を發して、小荻を過ぎ、脇山村に至る。行くこと二里許にして、中村と云ふ地に至るに、山川紛糾なり。そこに、世にいふ鸚鵡石と云ふものあり。山の半腹に頽然とり。路迂にして窄く、攀ぢ躋りつゝ、且望み且行く程に、三四町にて、其の石の下にいたる。これを觀るに、高(たかさ)十四丈、濶(ひろさ)二十丈許、西北の方ハ、草莽根を被へど、喬木ハなし。其の右へ相距ること、百餘歩にして、巖あり。其の上ハ、數人を座すべき程の廣(ひろさ)なれバ、同行の者、こゝに居て、ものいひ、或ハ歌うたひ、又ハ鼓うちなどす。兩石の間に、やゝ平(たひら)なる處あり。氍毹(もうせん)を敷き坐して聽くに、石聲に應じて、或ハ人言をなし、或ハ歌うたひ、又ハ鼓をうつ。其

の軽重舒疾、一として差ふところなし。但、幔を隔てゝものいふが如く、其の聲左の角にあり。意ふに、虚中、物を受くること、鏡の影をうつすが如くなるらん。たゞ、笛の聲のみは應ぜず。これは、律の協はざるにてもあるべし。昔は、草木生ひ茂りて、此の石あることを、人も知らざりしが、四五十年以前、樵人の、木を伐る聲の響きけるを、始は、これを異し懼れて、逃げ走るもありしに、後には聞き狃れて、遂に名ある石にぞなりしといふ　勢遊志

普通國文上の巻　終

明治二十三年三月十五日印刷

同　年三月十九日出版

版權所有

編輯者　東京市小石川區西江戸川町一番地　佐藤定介

發行者　全　麹町區飯田町五丁目八番地　畠山健

兼印刷者　全　京橋區南傳馬町一丁目十二番地　吉川半七

各府縣發賣所

東京神田裏神保町	敬業社
同　日本橋通三丁目	丸善書店
同　同　一丁目	大倉孫兵衛
同　神田表神保町	中西屋邦太
同　同　同	開新堂
同　同　裏神保町	三省堂
同　小石川大門町	青山清吉
大坂心齋橋南一丁目	松村九兵衛
同　北久太郎町	柳原喜兵衛
同　久寶寺町	三木佐助
同　備後町	梅原龜七
京都御幸町	藤井孫兵衛
熊本新二丁目	長崎次郎
鹿兒島本町	吉田幸兵衛
岐阜米屋町	三浦源助
愛知名古屋	片野東四郎
同	川瀨代助
北海道函館	魁文社
同　札幌	前野長發
千葉本町	多田屋支店
同　佐原	朝野利兵衛
同　東金	多田屋本店
靜岡新通一丁目	勝見儀助
同　江川町	廣瀨市藏
同　吳服町	吉見義次
山梨甲府柳町	徵古堂
同　八日町	五明堂
同　常盤町	內藤傳右衛門
長野善光寺前	西澤喜太郎
同　松本深志町	高見書店
同　同	水琴堂
同　小諸	小山佐傳次
群馬前橋本町	煥乎堂
同　高崎田町	煥乎堂
埼玉鴻巣町	長島爲一郎
宮城仙臺國分町	金港堂
同　同	高藤書店
岩手盛岡中橋通	便益堂
山形八日町	五十嵐太右衛門
秋田大町	本間金之助
茨城水戶上市泉町	川又銀藏
同　土浦町	伊沼彌助
同　同	間原平右衛門
同　石岡町	高野清助